

第1回気仙沼・本吉圏域宿泊事業者部会

【日時】令和7年6月13日（金）午前10時から正午まで

【場所】気仙沼合同庁舎5階 503会議室

【委員からの主な意見】

（1）施策1 観光地域づくりを行う地域への支援

（（一社）南三陸研修センター 阿部委員）

- 宿泊部会として「滞在時間の倍増」に取り組み、居心地満点の時間を提供したい。
- 宿を単なる泊まる場所としてではなく、地元の人と観光客の交流が生まれる「場」とし、地域とのつながりを深めていきたいと思う。
- 地域資源を活かした体験型ツアーにチャレンジしたい。気嵐や漁業体験など、この地域ならではの文化・自然と直接触れ合える観光体験は、観光客の心に強い印象を残すため、漁業者との調整は必要であるもののチャレンジすると面白いと思う。

（民宿ながしず荘 遠藤委員）

- “気仙沼・本吉地区に行きたい”と思わせる独自の魅力をもっと創出すべきだと思う。現在は観光と食がどこでも似たような内容になりがちで、他地域との差別化が難しいと感じている。そのため、食や観光以外の視点から新たな魅力を掘り起こし、気仙沼・本吉にしかない価値を打ち出す必要があると考えている。
- 例えば、当宿は南三陸の中でも神割崎の外れにあり、他地域への移動の中継地点として使われることが多い。その中で「のんびりした田舎の家」という独自のスタイルを打ち出ししている。こうしたちょっと違う魅力づくりを進めてはどうかと感じている。

（民宿砂子 川村委員）

- 海の体験型観光に取り組んでいるものの法的規制が非常に厳しい。漁業者としても、取り巻く環境の変化により第1次産業だけではやっていけない状況となっており、観光とリンクした6次産業化のような観点で取り組もうとしているが、やはり法的規制がネックになっている。規制の話となると民間では手が出しにくい部分が多いため、県や市の観光課に対して、国との折衝をお願いしたい。
- 当圏域は屋内観光施設が少なく、荒天時の代替手段に乏しい。これは地元の我々が考えていかなければならないことであるが、出てきたアイデアに対して行政からの支援をいただければと思う。決してハコモノを立てて欲しいという趣旨ではない。
- オルレについて県全体で新コースの創設が進んでいるが、既存のコースの整備も必要。倒木や落石によりコースが寸断されることが日常茶飯事になってきている。更に、地元の人がボランティアでせっかく修繕を申し出てくれても、国立公園であつたり保安林の関係で着手できない。行政により整備されることが一番だが、法規制の緩和についても国と調整していただきたい。

（大鍋屋本館 熊谷委員）

- 欧米からのインバウンド客に聞くと、欧米には山と海の絶景を同時に味わえるロケーションがあまりなく、三陸の景観はそれだけで需要があるとのこと。更に自然や小さな漁村、農村の暮らしといったリアルジャパンを体験できることで人気があるとのこと。

- 国内の観光客はやはり魚を目当てとする人が多いが、その多くが市内の特定の飲食店のリピーター客で、旬ごとに足繁く通ってきている。そのため、宿だけではなく飲食店の魅力・スキルアップも大切である。
- サイクルツーリズムも増えてきている。三陸道の整備により一般道は車が少なく走りやすくなっているということもあるが、岩手県遠野市がサイクリストに大人気であり、遠野に行く際に気仙沼にも来ていただいております、県をまたいだ広域的な連携も必要であると思う。
- 関東圏から見ると、東北の釣り船は安く魚が取れるので人気が高い。また、ライト層の人にとっても、漁港で釣りができるという点で気仙沼は人気がある。但し、昨今防犯上の理由で漁港の立入りを制限する動きがあるため、ルール化しせっかく来てくれた釣り客を締め出さないようにする必要がある。

（ホテルー景閣 斎藤委員）

- イベントの充実が重要で、気仙沼のビアフェスやカツオ祭りなどの週末は満室になる。毎週何かしらのイベントがあれば観光客が増えると思う。特に「ツールド東北」の気仙沼発着がなくなり宿泊客が激減したのは残念で、市には発着の復活に力を入れていただきたい。
- 個人的には気仙沼は橋の町「ブリッジシティ」とであると提唱している。その魅力を観光資源としてもっと活かすべきだと考えている。

（気仙沼ホテル観洋 田村委員）

- 「ここでしか食べられない・買えない」こだわりのある商品や体験の開発・PR が重要。サンドウィッチマンによる PR のように、発信力のあるタレントの活用は非常に効果的。
- 南三陸や気仙沼には、質の高い自然体験やスポーツ関連の観光資源があり、それらのさらなる充実を図るべき。また、朝や夕方などにも楽しめるイベントやアルコールが伴うイベントが宿泊に直結している実感があり、イベントの実施は非常に重要と考える。
- 徳仙丈山は近年、知名度が高まっており観光地としての可能性が広がっている。近年桜や花を追いかける観光客が増えているが、気仙沼には現状おすすめできる桜の名所が少なく、今後の整備に期待。大河原(千本桜)から岩手県の展勝地まで辿っていくような観光ルートができれば魅力的だと思う。
- 橋や魚市場、内湾のライトアップも美しく、観光資源としての価値が高い。地域全体でこうした魅力を活かした観光スポットづくりができると良い。

（気仙沼セントラルホテル松軒 鈴木部会長）

- 観光振興には、地域が主役になる体制づくりが欠かせない。特にイベントツーリズムなど、地域主導の取り組みは宿泊にも直結する。行政や事業者が下支えし、継続可能な形で地域を支援していくべきだと思う。
- 気仙沼・本吉圏域の強みは「食（ガストロノミーツーリズム）」「アドベンチャーツーリズム」「防災・震災」の3つ。ガストロノミーツーリズムは、食だけではなく地域の歴史・文化とセットで価値を高めるべき。また、食文化の違いに配慮した内容づくりが必要。
- 岩手の猊鼻渓には観光客がたくさん来るが気仙沼には来ないといった状況であるが、広域連携をすることで、岩手の観光後に気仙沼にも来ていただくといった観光ルートを設定することができるのではないかと。地域ごとに観光客を取り合ってもマイナス要素にしかない。広域連携こそが県の役割と考える。

（２）施策２ 仙台からの送客・（仙台圏域内での）周遊性向上のための二次交通対策

（（一社）南三陸研修センター 阿部委員）

- 宿泊税を活用して、宿泊者向けの交通支援制度を構築すべき。南三陸は観光地が点在しており、移動手段の不足が観光満足度を下げる要因になっている。レンタカーを利用する観光客に対して、金銭的支援を行うなどの仕組みが必要だと思う。
- トレイル利用者を支える移動・見守りサービスを地域全体で整備したい。トレイルや自然体験を楽しむ観光客、特に外国人客が増えてきている中で、「困ったら助けてもらえる」安心感のある仕組みを構築できたらいいのではないかな。現在は個人的に対応しているが、それを圏域として対応することで、観光客の満足度が高まると思う。

（民宿ながしず荘 遠藤委員）

- 当宿は最寄りの BRT 駅まで 8 キロも離れており、基本的には自家用車で来るお客様が中心となっている。一人旅の方などがたまに公共交通を使って来ることもあるが、送迎などに苦勞が伴っており、小型のコミュニティバスを循環させるなど、小回りの利く交通網の整備が必要だと思う

（民宿砂子 川村委員）

- 気仙沼は公共交通の利便性が低く、基本的に自家用車かレンタカー利用が中心になっているのが現状だ。地元の人でさえも公共交通だけでは生活が難しいため、二次交通の抜本的な解決は難しいが、来づらいからこそ泊まっていただけると逆手にとって考えている。現状としては、自家用車で来ていただくか、レンタカーを使用していただくしかないと思う。

（大鍋屋本館 熊谷委員）

- 沿岸部では二次交通の乗り継ぎが悪く、また、JR のみどりの窓口の営業時間も限られているため観光客から不便との声が多い。JR と連携して改善していく必要がある。
- レンタカーの利用が増加しているように見受けられ、サービス券の配布等の利便性確保の取組が必要。

（ホテルー景閣 斎藤委員）

- 三陸道のハーフインターの利用方法が分かりづらく、地元の人でも説明するのは難しい。レンタカー利用者が増えている中で、ハーフインターの改善は急務だ。

（気仙沼ホテル観洋 田村委員）

- 自家用車以外の手段で来訪する観光客に対し、タクシー券やレンタカーの補助券などが望ましい。
- バス会社・タクシー会社が周遊プランを作成する際の補助があれば、サービスが拡充されやすい。
- 徳仙丈山については、市の情報発信もあり知名度があがってきたと感じているが、シャトルバスが少なくアクセスが悪いので対応をお願いしたい。
- 気仙沼線の鉄路廃止など鉄道アクセスが悪化している中、JR 大船渡線の便数減少の話も聞こえてくる。大船渡線の維持・改善に向けて自治体と JR との連携強化が求められる。

（３）施策３ 快適な旅行環境のための受入環境整備

（（一社）南三陸研修センター 阿部委員）

- ハード・ソフト両面で、快適な滞在環境づくりを絶えず追求していく必要があり、例えば、宿泊部会内に「環境・客満足度向上委員会」といったものを立ち上げ、サービスの質向上を目指していくと面白いと思う。
- 淡路にいる知人のもとを視察した際に、富裕層をターゲットにした、いかなるニーズにも対応する“スーパーガイド”を養成し、そのスーパーガイドを全国に展開したいという計画があると聞いた。そういった高水準の人材がいれば、圏域の観光の魅力をより深く丁寧に届けられると考えている。

（民宿ながしず荘 遠藤委員）

- （家族経営で従業員も雇っておらず、受入環境や人材確保についてはノーコメント）

（民宿砂子 川村委員）

- 観光案内が十分に機能しておらず、宿泊客からもどこで観光情報を得れば良いかわからないという声が多い。ワンストップ窓口をしっかりと確立してほしい。

（ホテルー景閣 斎藤委員）

- 宿泊税の一部を使って宿泊事業者の人材確保や採用への補助金に充てるのが望ましい。

（気仙沼ホテル観洋 田村委員）

- 観光も水産業と同じように地域産業としての意識を高めていく必要があり、地域全体で観光への意識を共有できる勉強会や支援制度の実施が望まれる。
- インバウンド対応では、多言語対応や商品説明・情報発信ができる人材の育成が急務。

（気仙沼セントラルホテル松軒 鈴木部会長）

- スポーツ団体やイベント主催者に任せきりでは続かない。人材や運営面を行政と民間が協力して支えることが重要。持続可能な観光のためにも、人手不足を含む受入体制の強化は不可欠だと考えている。

（４）施策４ ターゲットを意識した効果的なプロモーションの展開（国内・インバウンド）

（（一社）南三陸研修センター 阿部委員）

- ターゲットを絞った上で、気仙沼圏域の豊富な食資源を活かした「究極の食ツアー」のようなテーマを打ち出してイベント的に展開したり、旅行会社やインフルエンサーとのコラボ、YouTubeなどのメディアを活用した情報発信を積極的に行う必要があると思う。

（民宿ながしず荘 遠藤委員）

- プロモーションの仕方については、ターゲットを絞った発信をするのか、全体的発信するのか、いずれかにした方がいいと思う。
- 観光地の魅力を細かく丁寧に発信することが重要だと考えている。YouTubeなどの媒体も活用して、“見る人には届く”情報発信を地道に続けていきたいと思っている。

（民宿砂子 川村委員）

- 唐桑ではみちのく潮風トレイルの影響でアジア圏ではなくヨーロッパ圏の旅行者が増えてきた。

- みちのく潮風トレイルの利用者は、一気に全行程を踏破するバックパッカー的なロングトレイル利用者と、複数回にわけて踏破するセクショントレイル利用者の二極化があり、それぞれに合わせたプロモーション戦略が必要。
- ロングトレイルは予定が立てにくく宿には止まらず野宿を基本としており、約週 1 回のペースで宿に泊まる。一方でセクショントレイルは時間的・経済的に余裕がある人が多く、欧米諸国向けの、トレイルに加え地域の食文化や習慣を肌で感じるようなツアーも需要がある。
- 国内向けの需要喚起として、スポーツツーリズムが有効である。特にジュニアスポーツは選手だけでなく家族総出で応援に来るため宿泊施設の収益率が上がる傾向がある。例えば気仙沼にもフェンシングの試合場があるが、こういったマイナー競技の試合場は全国的にも少ないので、閑散期の時期に大会を誘致できれば非常にありがたい。ぜひ行政には誘致をお願いしたい。

（ホテルー景閣 斎藤委員）

- スポーツツーリズムにも期待している。南気仙沼のスポーツ運動場整備が進めば、全国からのイベント誘致で宿泊需要も高まる。石巻にもスポーツ会場はあるが、町中にあるというのは強みであり、宿泊だけにとどまらず恩恵を受けることになるので、大いに期待している。
- 当ホテルはインバウンド客は少ないが、先日海の写真を撮りに来られた方がいた。我々が思いもよらないところに需要はあるので、行政と連携して模索していきたい。

（気仙沼ホテル観洋 田村委員）

- 外国人個人旅行客が少しずつ増加傾向にある。最近では外国人高校生が団体で宿泊する例もあり、こうしたケースに対応できる施設が求められている。
- ハラルやベジタリアン対応など、多様なニーズに応えられる受け入れ体制の整備も重要。気仙沼はインドネシア出身者も多く、多文化共生の地域的強みを観光にも活かせる可能性がある。

（気仙沼セントラルホテル松軒 鈴木部会長）

- 一般観光客を新たに呼び込むのは、既にこれまでも色々な取組したり考えたりしているが難しい。それよりも、「イベントツーリズム」が効果的。仙台での大型イベント開催時には、気仙沼にも波及効果が出ており、宿泊＋飲食への波及を狙い、イベントと連動した集客施策が必要。
- 特に海外に対する情報発信が非常に重要だと思うが県の考えを伺いたい。

→松本観光戦略課長

- ・従来の大規模キャンペーン型の情報発信から転換し、今後は SNS やインフルエンサーなどを活用した、ターゲットを絞ったデジタルプロモーションに注力すべきと考えている。
- ・特に海外向けには「VISIT MIYAGI」のような動画・画像を通じた魅力発信を強化し、個人旅行客（FIT）の誘客を促進したい。
- ・あわせて旅行会社との連携も含め、効果的な発信に取り組んでまいりたいと考えている。

→小嶋所長

- ・マクロの部分では松本課長の発言のとおりであるが、結果を出すためには、情報発信の仕方については、まだまだ工夫と改善の余地がある。より効果的な発信を実現するためには、皆様の知恵やご協力が不可欠であり、今後も一緒に取り組んでいきたい

(5) その他の意見

(大鍋屋本館 熊谷委員)

- 宮城が東北に先立って宿泊税を導入する以上は、観光客から「その分便利になった、魅力が向上した」と、また他の県からも「やっぱりうちの県も宿泊税を導入しないといけないね」と思われるような政策に結び付けていただきたい。

(ホテルー景閣 斎藤委員)

- 宿泊税導入に伴うシステム入れ替え費用は査定により補助額が十分でなく、実質的に事業者には負担がかかっている。特に小規模事業者にとっては大きな負担となっており、この点もカバーしてほしい。経営環境は厳しいので、こうした支援も含めた全体的なフォローが必要だと考えている。

(気仙沼ホテル観洋 田村委員)

- 地域クーポンについて、仙台市では実施されているが、気仙沼では実施されていない場合等に、観光客から「なぜこちらでは使えないのか」と不満の声が上がっている。実施するのであれば県全体で統一して取り組んでほしい。

(気仙沼セントラルホテル松軒 鈴木部会長)

- 会議が2回というのは少ない。2回だけではなく、適宜臨機応変に開催してほしい。
- 宿泊税を開始した以上は、成果を出さなければならない。
- 幅広い政策を行っても砂に水を撒くようなもので、成果も出ず、また、成果の可視化もできない。具体的な施策を考える前にまずは「何に取り組むのか」というのを絞り込むべき。宿泊税の使途については、インバウンドに特化すべきと個人的には考えている。